九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

プラトンのディアレクティケーについての一考察 : Rep. VI, VII巻の叙述をめぐって

森, 俊洋
九州大学大学院 : 博士課程 : 哲学

https://doi.org/10.15017/27466

出版情報：哲学論文集. 4, pp.101-120, 1968-09-28. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

プラトンのディアレクティケーについての一考察

―― Rep. VI. VII 巻の叙述をめぐって ――

森　俊洋

序

プラトンによれば、愛智の学としてのディアレクティケー（διαλεκτική）は、一般的には次のように定義される。[1] 即ち、「夫々のイデアのウーシアについてその logos を獲得する」学であるとされる（Rep. 534b）。Respublica では「線分」の比喩以降に於て、幾何学等の数学的諸学との対比及び連関のもとにディアレクティケーの説明が叙べられているが、それによると基本的には、諸々の仮設（ὑποθέσεις）から出発して最早仮設とはされない始め（τὴ ἀρχὴ ἀνυπόθετος）へと上りゆき、それに到達したらば、今度はそこから終り即ち結論（τελευτή）へと下りゆくという、上り道、下り道の二つのプロセスに表わされている。問題は勿論、我々にとってもプラトンの愛智者にとっても、先づもって如何にしてその「一切のアルケー」へと達しうるかということであるが、プラトンはその方法の具体的例示はおろか、方法論そのものについても、「仮設を文字通りに仮設として扱い、それらをいわば梯子の段や出発点（ἐπιβάσεις τε καὶ ὁρμαί）として用い、それらを廃棄（ἀναιρεῖν）しながら上りゆく」（511b, 533cd）ということを除いては、積極的には殆ど何も語っていない。しかしながら、プラントンがディアレクティケーのみを真に知識の名

に価いすると考えたことにわずかでも疑念を挾むことは不可能である以上、我々としては直接的な資料が如何に乏しかろうと、解釈の試みに迫られる。

そこで、「仮設からの上り道」という方法の解釈や肉付けにとって我々の考察すべきものを、さしあたって、㈠数学との連関、㈡ Phaedon での ὑπόθεσις method 、㈢洞窟の比喩、の三つに絞ってみる。㈠は VI. VII 巻の主要論点であり、㈡にもやはり上り道のプロセスが認められるし、㈢は教育による魂の転向と向上の道行きの比喩である。以下に於て、我々は先づ㈠で、上り道がどのような性格をもち、また如何にして可能であるかの考察に努め、次に、そこで得られた結果が、㈡、㈢でどのように裏付けられるかをみる。

（一） 数学とディアレクティケー

VI. VII 巻の叙述によれば、プラトンは数学を二面性に於て捉える。一は当時の数学者が実際に従っていたと思われる方法に対する批判であり（510 b 以下）、他はディアレクティケーの予備学として積極的にその効用が期待されているプラトン自身の考える数学である（520 c 以下）。先づコンテクストに従って彼の批判に眼を向けてみると、その論拠は大別して、感覚（sense-images）の使用と仮設の用い方の二つである。数学者、特に幾何学者は感覚的図形等を用いるが、ディアレクティコスは一切用いないというプラトンの言は、両者の対比連関と独立に理解されてはならない。というのも、プラトンは、数学者がそれらを用いるのが必然的であるとは何処にも明言していないし、また彼らのディアノイアの対象は、砂の上に描かれた与えられた正方形ＡＢＣＤではなく、正方形そのもの、正方形のイデアであるとされる。もしプラトンの考えていた数学が、アリストテレスの云う如くにイデアと感覚物の中間的実在という個有の対象を扱い、そしてその際必然的に感覚を助用するというのであれば、当面の問題も数学独自の問題として扱うべきであろうが、事態はこれに否定的である。[2] そこで、ディアレクティケーとの対比連関に於てみるとな

ると、プラトンが両者に共に認めた仮設の（ἐξ ὑποθέσεων）方法に注目すべきである。

この方法についての批判は、数学者が ὑποθέσεις であるはずのものを ἀρχαί として、それについては最早 logos を与える必要なしとしているという如くに語られる（511cd）。つまり、数学でみられる ἀρχή から τελευτή へという論証も、改めてその ἀρχή を、真理性に関して未だ不定なものとして、文字通りの意味で ὑποθέσεις として、ディアレクティケーの考察を待たねばならないのである。[3] とはいえ、ディアレクティケーの下りの道も、「一切の ἀρχή を獲得した暁には、今度はそこからそれに従うものどもに従って（πάλιν αὖ ἐχόμενος τῶν ἐκείνης ἐχομένων）、かくて τελευτή へと下りゆく」（511 bc）とされており、これはやはり一種の論証のようである。論証が一般に、始め（ἀρχή）から結論（τελευτή）へ、証明を要しない前提から証明されるべき結論へと推論することであれば、ディアレクティケーにも、数学と同様の批判をせねばならないのであろうか。問題は、プラトンがその ἀρχή に与えた、「最早仮設とはされないもの」（τὸ ἀνυπόθετον）という表現の意味にある。

ἀρχή という表現の限りでは、数学についてのプラトンの言からすれば、(1) ἀκίνητος（533c）(2) λόγον δίδοναι の要なし、(3)万人に明白である（ὡς παντὶ φανερά）(511cd)、の三点が意味される。このうち(1)は、ディアレクティケーの場合でもその下り道の然るべき出発点としてそのまま認められるが、しかし、(2)と(3)は数学と同様には考えられない。「一切のものの ἀρχή」の logos を掴むことこそが上り道の使命であり、苦労してその logos を掴みえた愛智的支配者に応しき者にのみ「明白な」ものとして現われるのであるから。従って、ἀρχὴ ἀνυπόθετος の特異性は、数学の場合と異って、それ自らの logos を何らかの仕方で掴まねばならぬという点にある。

とはいえ、λόγον δίδοναι と一様に云っても、ὑποθέσεις の場合と ἀνυπόθετον の場合では勿論異らねばならない。前者はとにかく ἀρχή からの或る種の論証によって可能であろうが、後者の場合は、それが ἀρχή についてであ

る限り、決して証明によって可能になる性質のものではなく、従ってまた、上り道も決して証明や論証の類には屬さないことになる。[4] しかしまた、ἀνυπόθετον は、ἀρχή として要請（postulate）される数学の公理の如きものでもない。確かにディアレクティケーは、それらを一応真理性に関して不定な状態に戻す所から始まるわけであるが、だからと云って、上り道が、雑多な定義や公理を数に於てできるだけ最少の公理系へと還元し、それらから一切の命題を論理的に導出しようとする近代の所謂 axiomatization の試みの方向と同じであるとは云えない。プラトンの求めた ἀρχὴ ἀνυπόθετος は唯一絶対のものであり、何よりも先ずそれに於て第一に真理性が顕現する所のものであらねばならなかったから。Robinson, R. は、この 'dogmatic' な ἀρχή は、'an incorrigible proposition' であり、プラトンはそういう 'a single axiom' から 'a whole system' が生じうると考えていたから、今日的な 'logical rigour' よりははるかに曖昧であると述べている。[5] しかし、果してプラトンが、唯一絶対の公理命題から一切の——真実在と生成変化とを問わずとにかく哲学が対象とすべき一切の——世界についての知識を導出（deduce）しうると考えていたかは疑問である。前にも触れた如く、ディアレクティケーの下りの道は確かに或る種の論証ではあろうが、それは公理命題からの数学的論証とは異るものである。プラトン的な意味合いでの logical rigour というものがもし云えるとすれば、それは deductive method に求めるよりはむしろ、唯一の ἀρχὴ ἀνυπόθετος に於て現われるとプラトンが信じた真理性にこそ求めるべきであろう。この真理性がどういう性格のものであるかは、我々の考察の最後の段階に至るまでは語ることができない。

さて是迄の所、プラトンの当時の数学への批判を通して、ディアレクティケーの ὑπόθεσις と ἀρχὴ ἀνυπόθετος、特に後者についての λόγον αἰδοῦμαι に関して、ネガティブにみてきたわけであるが、上り道そのものについてポジティブには未だ何も語りえない有様である。[6] そこで次に、数学の別の面、即ち予備学としてプラトンが積極的に取上げて

いる面を中心にしてみてみる。

しかしながら実はこの点に関しても、テキストで与えられる直接的なデータは余り期待できない。五つの数学的諸学の叙述では、「生成から真理と存在（ἀληθείά τε καὶ οὐσία）への魂自らの転向を最も容易にするため」（525c）という表現、もしくはこれとほぼ全く同等の表現がくり返され、最終的には「諸学相互の共通性と親族関係」（κοινωνία καὶ συγγένεια）への、そして存在（ὄν）への綜観（σύνοψις）」（531cd. 537c）が、ディアレクティケーにとって不可欠であると語られるだけである。そして数学のもつどのような性格の故にそれが予備学として効果のあるものなのかという点については、その対象が ὄν ではあるが、ὄν についていわば、夢を見ているが如きであるとされる（533bc）。我々はこれらに加えて、問題の理解のために、当時の幾何学についてみられる二、三の点を参考にしてみる。

先ず、ギリシャの幾何学に於て ἀνάλυσις と呼ばれた証明発見のプロセスと、これに対して σύνθεσις と呼ばれた実際の論証のプロセスを取上げてみる。というのも、少くとも表面上はこれらは夫々、ディアレクティケーの上り道、下り道の両プロセスによく似ているからである。アレクサンドリアのパップスの定義によれば、[7] ἀνάλυσις とは、求めるべき結論を同意されているものとして（ὡς ὁμολογούμενον）、そこから出発してそれに続いて従うものどもを通って（διὰ τῶν ἐξ ἧς ἀκολούθων）、σύνθεσις のプロセスに於て同意される或るものへと進む道である。」つまり、帰結が既に真であると（ὡς γεγονός）仮定して、それがそこから従いくるその前にあるものが何であるかを考察し、そのプロセスを既知の何か、或いは ἀρχή のグループのうちの何かに達するまで遡上る、いわば逆方向の証明（ἀνάπαλιν λύσις）であるとされている。これに対して、σύνθεσις は全く逆のプロセスで、ἀνάλυσις に於て最後に達したものから出発して、先には前にあるとされたものどもを然るべく整理して（κατὰ φύσιν τάξαντες）、相互に結びつけて、帰結へと達するものであるとされる。[8]

さてこの ἀνάλυσις がディアレクティケーの上り道と関連するか否かをめぐって、註釈家の意見が対立している。[9]

関連なしとする側は、ἀνάλυσις ちやはり'deductive method'であって、σύνθεσις と全く'reciprocal'であらねばならぬ、つまり、単にpならばqというだけでなく、qならばpでもあらねばならぬ、ということを論拠とする。他方、関連ありとする側は、ἀνάλυσις が deductive ではなく'intuitional'であるということを主張する。確かに、パップスのことばだけからすれば、deductiveととる線がより然るべきであるように思えるが、intuition 説の註釈家が挙げる ἀνάλυσις に関する、例えばアリストテレス Metaphysica 1051a21 以下の「図形の分割」等の論拠から云えば、むしろ intuitional な発見のプロセスととる方が妥当ではないかと思われる。幾何学者は、三角形の内角の和が二直角であることの証明に先立って、与えられた三角形ABCに、彼にとって既知の定義「一点をめぐる角は二直角に等しい」が、「可能的にある」（ἐνυπάρχει δυνάμει）と考えて、それに補助線を引くことによって、即ち与えられた図形を「分割する」（διαίρειν）ことによって、「現実のものへ」（εἰς ἐνέργειαν）と導くという発見のプロセスたる ἀνάλυσις を踏まねばならない。アリストテレスはこれを幾何学者の νοήσεις の働きと呼ぶわけである点、この場合の νοήσεις は、Bluck や Cornford の云うように、'intuition'直観と理解すべきであろう。補助線を引くということ自体は、証明されるべき結論と発見されるべき前提との間が reciprocal であると否とに関らず、端的に空間直観による発見であると考えるべきであろうから。[10]

しかしだからといって、この αναλυσις 或いは ἀπαγωγή（reductio）とディアレクティケーの上り道がそのまま重なってはならないことは、既にみた ἀνυπόθετον の考察から明らかである。とすれば、我々としては一体如何なる関連を両者のうちに見出すべきであろうか。もしも ἀνυπόθετον の真理性が公理的性格のものではなく、従ってそこからの論証もまた数学的な deduction と同一種類のものではないとすれば、数学を予備学として重視するプラトンにとって残る所は、まさに直観による発見ということ自体である。唯、それが、我々の住む感覚世界としての空間に

対する直観か、それともディアレクティケーに個有な直観か、という点で区別されるのである。そしてこの区別は凌厳である。ディアレクティケーに個有な直観とは、感覚（sense-images）の使用に於て認められる空間直観の自明性を、そしてそれとおそらく不可分の関係にある ἀρχαί の真理性を先づ疑ってかかる所から始まるからである。[11]

しかしまた、区別の厳しさと同時に、そこには或る意味での連続がなくてはならない。プラトンが、数学が ἀληθείά τε καὶ τὸ ὄν の方向へ魂を向かわしめると云うのはこの点にあるのであり、描かれた図形は用いるがその思惟の対象はイデアであるというのも同様である。ではしかしその連続の意味は具体的にはどうであろうか。

プラトンは算術（ἀριθμητική）を先づ予備学に導入する際に、我々の感覚のレポートを、最早それだけで充分でそれ以上の考察に νόησις をかりたてないものと、更に νόησις をかりたてるものとに二分し、数（ἀριθμός）というものはこの後者の部類に属するとしている（523a 以下）。逆に云えば、数が νοητόν であらねばならぬということが、そしてただそれだけのことが、既にある種の感覚のレポートから要請されるということである。ただそれだけのこと、というのは、この場合 νοητόν であらねばならぬということが、その種の αἰσθητόν であっても、もう一つの種の αἰσθητόν であってもならぬ、ということと等価であることを意味する。即ち、今や ὄν ‖ αἰσθητόν という従来の等式が否定されることになり、αἰσθητόν とは別の ὄν があるというまさにそのあるもの、存在するもの（ὄν）に、我々の意識が向かうのである。空間直観に頼る幾何学者は、「正方形そのもの」を、いわば無意識的に「与えられた正方形ABCD」から区別していると思われる。[12] プラトンのディアレクティコスは、「正方形」を ὄν ‖ αἰσθητόν の明確な意識で捉え直さねばならない。この否定的な意識に直結する、別の ὄν があるというその ὄν の積極的な意識が、ディアレクティケーが自己の然るべき対象として、νοητόν としての ὄν を措定するに充分な資格であると云える。ではこの意識は何によって我々のものとなるのか。プラトンはそれを、ὄν への σύνοψις と呼んだ。[13] そして我々は、我々の議論の厳密さを守るために、それを ὄν への σύνοψις の第一段階、もしくは予備的段階と理解しよう。

数学者の直観とディアレクティコスがもつべき直観は、この最初の σύνοψις という点で峻別されると同時に密接につながっている。

かくて、予備的な σύνοψις の段階を経て、自らに応しき対象に向かいあった直観としての νόησις は、ἀνυπόθετον の真理性の logos 獲得のために上り道の道行きを始めるわけであるが、そこでは、νόησις は本来的な意味での ὄν への σύνοψις の考察を迫られると考えられる。つまり、それは表面的には次の如き二重構造の考察に努めねばならないが、その両面は常に綜観（σύνοψις）されねばならない。即ち一方で、ὄν を最早 ὄν μὴ αἰσθητόν の否定的意識からの、その限りでの ὄν としてではなく、まさに ὄν として、真の存在様式をもった ὄν として捉えねばならない。この場合注意すべきは、ὄν μὴ αἰσθητόν からの、その限りでの ὄν は、我々の空間直観や或る程の感覚のレポートから σύνοψις の予備段階を経ることによって認められたが、真の存在様式をもった ὄν とは、存在に関する凡ゆる問を集約した意味での「存在とは何か」という問に対する回答を要求しうる権利をもったもの、ὄν がまさに ὄν としての自己を問いうる権利をもったものである、ということである。かかる権利主張に対して、感覚や空間直観には答える義務はないし、またそうする能力もないことは明らかである。プラトンはこの義務を、ὄν を自らに応しき対象として措定した責任に於て νόησις に負わせている。[14] しかしまた他方で、ὄν μὴ αἰσθητόν の否定的意識は、その別の ὄν がまた「大でも小でもある」ものとは異った「大そのもの」であり、一般に「まさに夫々である所のもの」（αὐτὸ ὅ ἐστιν ἕκαστον ὄν）と呼ばれるものであるということの意識とも直結している。つまり νόησις は、この「ものそのもの」という普遍的自体性を要求する「何であるか」の問にも答えねばならない。「一」とはそもそも何であり、「三角形そのもの」とは何であるかの問は、数学の諸々の ἀρχαί を真理性に関して未だ不定なものとみなし、ὄν μὴ αἰσθητόν の不等式の意識が確認された以上、当然改めて提出されるべきものである。かように、νόησις は、表面的には、真の存在性と普遍的自体性の両面の考察を迫られる。

所が、一方での問、他方での問、とは云っても、夫々別々に νόησις が ὑπόθεσις をたてて考察するものではない。我々が ὄν ἀναίσθητον からの ὄν の意識を σύνοψις の予備段階と呼んだのは、実はその ὄν の意識が、その両面の問を、νόησις によって σύνοψις されるべきものとして提起してくる性格のものだったからである。では σύνοψις の本段階はどのように為されるか。個々の ὄν の「何であるか」は、それが ὄν に関する問である限り、「真の存在性としての ὄν」についての問と必然的に連結されねばならない。「何であるか」がそこに於て真に現われる所の普遍的自体性を保障するものが、「存在性としての ὄν」だからである。逆にまた、「存在性としての ὄν」がそれだけで観念的に捉えられるものでもない。個々の具体的な ὄν を離れて存在性を語ることはできないからである。このように、両面の問の相互の必然的連関を考察することが σύνοψις の本来の姿であり、これをなしうるのはまさに直観としての発見的な νόησις をおいてはないのである。

さて、このようにみてくると、上り道の解釈に、わずかではあるがある光明を見出す。もしもディアレクティケーが、単に個々の ὄν についてその何であるかだけの logos を与えることを目指しているのであれば、そしてその場合には、ὄν は最早正当には ὄν と呼ばれえず、概念と云われるものになってしまうのであるが、もしそうであれば、上り道は個々の概念の定義を与えるためだけのものとなり、それは例えば、類種の系列に整理することによって可能となるようなものであろう。しかしプラトンの問題は概念にあるのではなく、まさに ὄν にあるのであり、また彼の叙述のどこにも類種系列といった hierarchy を意味する表現は見出せない。「ものそのもの」をまさに ὄν として捉える、つまり普遍的自体性と真の存在性の σύνοψις に於て捉えることにこそ、上り道に於ける直観としての νόησις の使命がある。幾何学者は、与えられた三角形ABCのCからABに平行な直線CDを引き、BCの延長たるCEを引くことによって、一点をめぐる角が二直角であることに問題が還元できることを発見するために補助線を引

くことが、彼の空間直観のなせるわざである。ディアレクティコスは、三角形そのもの」に眼を向け、それの「何であるか」を改めて存在性に於て捉えんと努める。その際、問題はただ「三角形ＡＢＣではなくて「三角形そのもの」にだけ関わるのではなく、「諸々のイデアを用いて、それら自体を通じて」（511c）のことであらねばならない。一言でいえば、直観としての νόησις が、この「諸々のイデアを通じて」、ἀνυποθέτος によって、存在性に於てイデアを捉えると同時に、イデアに於て存在性を捉えるという発見のプロセス、これが上り道である。プラトンはこの二重構造をもった上り道が、ἀνυποθέτος の究極の所で、イデアの普遍的自体性と真の存在性を一挙に保障する唯一絶対の真理性の直観である τέλος の発見に達し、そこが一切の問題に logos を与える ἀρχή であると確信していたのである。[15] ἀρχὴ ἀνυπόθετος とは、いわば ὄν の完全現実態がそこで姿を現わす所のものであろうから。

さて、数学との連関でこのようにみられたディアレクティケーの上り道の解釈について、我々に残された考察は、これが Phaedon の ὑπόθεσις method の叙述と、洞窟の比喩から、どれだけの裏付けを得ることができるかということである。

（二） Phaedon の ὑπόθεσις とディアレクティケー

Phaedon 99d 以下にみられる ὑπόθεσις の方法は、ものの原因考察の「次善の方策」（δευτέρος πλοῦς）として、感覚物を通じての考察を捨てて logoi の中で考察しようというソクラテスの提唱のもとに示される。そしてこの方法自体についての叙述が、Rep. の場合と異って可成り明確になされているが（Phd. 100a, 101de）、それは簡単に示せば大体次の如くである。個々の demonstrandum について最強と思われる logos を仮設にたてて、それから帰結するもので仮設と一致するものを真、そうでないものは偽とする。また帰結したものども相互の整合性を調べて仮設を吟味し、[16] 更に仮設自身の logos を与える必要に迫られれば、より高次の別の仮設をたて、それからもとの仮設を引き

出し、このプロセスを何か充分な点（ἱκανόν τι）まで逆上って続ける、とされている。

所が、この方法論は、その実例であるはずの、個々のイデアの存在を仮設にたてての魂の不死証明とは余りしっくり合わないのである。というのも、Phd. の方法論の主眼点は、ὑπόθεσις をどのようにしてたて、そこからどう結論を導くかにあるのではなく、仮設の吟味と根拠付け（λόγον διδοναι）にある、つまり、仮設の'provisionality,' 'tentativeness' の強調にあることは明白だからである。従ってむしろ、エレンコスの方法として、例えば結論を refutandum として然るべく認められた（仮設から結論と矛盾するものを導いたり、或いは、仮説自身を refutandum としてそこから或る矛盾を導出するといった場合の方法とみた方が理解に容易なのである。[17] また仮設自身の根拠付けにしても、上位に来る ἱκανόν τι が実際の対話者同志の同意を意味するとすれば、この上り道もやはり仮設の 'provisionality' の強調であって、それ以上のポジティブな面は、少くとも方法論としては期待できないのである。

そこで Phd. のコンテキストにそった実例たる不死証明が期待されるわけであるが、実質的に方法論と合致しているのは、証明の為に、個々のイデアの存在を仮設にたてたということと、証明の終った後での、最初の諸々のイデアの ὑποθέσεις がもっと明白になるよう更に考察すべきであるというソクラテスの勧告（107 b）だけである。方法論が語る仮設の吟味はコンテキストでは見出せないし、コンテキストの示す仮設のたて方と結論の導き方は方法論にはないのであるから。[18] とすると、Phd. での ὑπόθεσις method とは結局の所、個々のイデアの存在を仮設にたてての ものの考察方法であって、唯その場合、一般的に ὑπόθεσις とは 'provisional' な性格をもつので、更に上位からの根拠付けが必要であるが、という但し書きつきのものという如くに理解せねばならない。

では、これは先にみたディアレクティケーの上り道とはどのように関係するか。Phd. の ὑπόθεσις はあくまで個々の demonstrandum のためにたてられるべきものであったが、ディアレクティケーでは強いて demonstrandum を挙

げれば、νόησις が σύνοψις を通して直観すべき、存在性に於けるイデアとイデアに於ける存在性という二重構造のものであったといえる。従って、個々のイデアの存在という Phd. の ὑπόθεσις 自身が、ディアレクティケーのいわば demonstranda になると考えられる。個々のイデアの存在とは、それ自体としては、やはり ὄν がそれによってまさに ὄν とされる所の真の存在性への問と、個々の ὄν の普遍的自体性に於ける「何であるか」の問の、二重の問を σύνοψις されるべく投げかけてくるものであろうから。つまり Phd. のイデアの存在を仮設にたてる方法は、それからの論証という面を一まず取り除いて、その仮設を真に仮設として不定なものと考え、それの logos を掴むための上り道の出発点とする、という如くに解されれば、それはディアレクティケーの上り道となりうるはずである。

このことはまた、Phd. のコンテクスト自体から更に裏付けられる。即ち、Phd. の方法は、ものの原因考察の最良の方策とも考えられる、直接に「善」(τὸ ἀγαθόν) に向かう目的論的考察に見離されたソクラテスが取った「第二の航海法」であった(97 b 以下)。しかして、着くべき港は同じとすれば、個々のイデアの存在を ὑπόθεσις とする考察方法もやはり、「善」を究極的には獲得せねばならない。そして後述の如く、ディアレクティケーの ἀρχὴ ἀνυπόθετος は、実は「善」のイデアに他ならない。とすれば、Phd. の方法とディアレクティケーの上り道は重り合うわけである。

所で、上り道について、少くとも我々にとっては、その 'provisional' な出発点たる ὄν の意識という ὑποθεσις と、究極の然るべき真理性を捉えた出発点としての ἀρχὴ は明確に認められたわけであるが、その中途の段階はただ、「諸々のイデアを通じて」の σύνοψις の発見の道行きということだけであった。この点に関して Phd. はあるヒントを与えてくれる。不死証明に於てソクラテスは、最も重要な一つの implicit premiss として、あるエイドスAと別のエイドスBが互いに反対関係にあって、その際エイドスBがエイドスCと本質的結合をしている場合には、Aは単にBばかりでなくCをも受け容れないという前提を用いている(103 b 以下)。このエイドス間の結合関係や

反対関係の考察が、「諸々のイデアを通じ経めぐって」の上り道にとって、一つの実質的内容をもたせるのではないかと予想される。[19] エイドスの何であるかを存在性に於て、また存在性そのものをエイドスに於て捉える νόησις は、エイドスのコイノーニアをも存在性に於て捉えねばならない。或いはむしろ、コイノーニアを有効な手掛りとして、αἴνιξις の考察を進めねばならない。以上簡単に Phd. の ὑπόθεσις からのある程度の裏付けを見ることができた。

(三) 洞窟とディアレクティケー

さて、最後に我々は洞窟の比喩 (Rep. 514a 以下) からの裏付けを見なくてはならない。洞窟は、それに先行する「太陽」(507 a 以下)、「線分」(509 d 以下) の二つの比喩、特に前者と並んで、いわば、「光と真実 (ἀλήθεια) についての比喩」ともいうべき一連のものを構成する。夫々の詳細や相互の整合性の考察[20]は当面の仕事ではないので、簡単に示すと次の如くである。太陽の比喻は、丁度太陽が ὁρατὸς τόπος 全体を成立させている如く、νοητὸς τόπος に於ては「善」が真実 (ἀλήθειά τε καὶ τὸ ὄν) を照らして知識と存在の究極原因であるということを語り、洞窟は、その内と外に夫々、人工の火に照らされている影と実物、太陽に照らされている影と実物という、二つの影と実物の関係を設定して、鎖を解かれて転回した囚人の、内から外へ、遂には一切の原因たる太陽そのものへという上り道を描き、その各段階への移行を、「真実な」(ἀληθής) という形容詞の比較級を用いて示している。上り道とは、「より多く真実なるもの」(ἀληθεστέρου) へという道行きに他ならないというのが、比喩のまさに語らんとする所である。

我々の問題は「真理性」ἀλήθεια にある。究極の真理性の logos を持つべき ἀρχὴ ἀνυπόθετος が、知識と存在の原因とされる「善」のイデアであることは既に明白だからである。そこで洞窟の比喩を成立せしめている「真実な」ἀληθής ということばの意味をみてみよう。これが最初に用いられるのは、未開放の囚人達の認識について、彼

らにとっては影と実物という如き関係が認識される可能性がないという条件のもとで、眼前を通り過ぎるものを夫々のものと「名付けていると信じている」(νομίζειν ὀνομάζειν)、即ち「真実と信じている」(νομίζειν τὸ ἀληθές) とされている (515bc)。[21] 「真実」とは、そこでは、そのオノマで呼ばれているものがまさにそのものとしてあることなのである。そして更に、この ἀληθές が比較級 ἀληθεστέρον となる状態、即ち解放された囚人が、是迄の影がそれの影である所の実物に眼を向けさせられる状態では、彼らに語られるのは、それらが「より多くあるもの」(μᾶλλον ὄντα) であるということであり、更に、「現在眼前にあるものの夫々が何であるか」と問われるとされている (515 d)。比喩が語る「真理」とはこのように、あるものの (ὄν) のありかた、即ち存在性と、個々の ὄν の「何であるか」の普遍的自体性——奇妙な表現かもしれないが「何でありかた」——を規定するものであると云える。そしてこれは、唯一の ἀρχὴ ἀνυπόθετος たる「善」のイデアがもつ究極の真理性の logos が、既にみた上り道の σύνοψις による直観としての νόησις の発見のプロセスの究極に於て捉えられる時、その時はじめて可能となるのであろう。

ここで我々は更に、洞窟での真理観についての Heidegger の興味ある解釈を参考にしてみよう。[22] 彼は、真理 ἀλήθεια とは、もと ἀ+λήθεια であり、事物の隠れなさ (die Unverborgenheit) のことであり、ὄν が自己を顕わにすることであったとし、プラトンにあっては、一般にイデアは、存在するものの何であるかに於ける自己呈示 (Sichzeigen des Was-seins) というもともとの Unverborgenheit としての ἀλήθεια と、それを見うるようにすること (die Ermöglichung seiner Sichtbarkeit) という「見ることの正しさ」(die Richtigkeit des Sehens) としての ἀλήθεια との相対的連関で捉えられるが、この両者の関連を結びつけている軛が、また ἰδεῖν から規定される ἰδέα であるからして、ここに於てプラトンは、Sehen に優位を与え、もって ἀλήθεια の本質を「見ることの正しさ」へと変更してしまい、Subjektivität に従属させてしまったという具合に評している。[23] しかし、軛となるのはイ

デア一般ではなくて、「善」のイデアであることは、太陽の比喩で既に明らかであり、しかも ἰδεῖν の側からの特別な強調は Rep. V-VII 巻では見出せない。とすれば、結局我々が ἰδέα を ἰδέα として残すのは、ただに「存在するものの何であるかに於ける自己呈示」だけなのである。そしてこれはまさしく、Heidegger の云うもともとの ἀνάθεια であり、比喩を成立せしめている最も重要な根拠であった。

そして、この一 ὄν の何であるかに於ける自己呈示」とは、やはり ὄν が、存在性に於てその何であるかが、また同時に何であるかに於て存在性が規定される状態に相違ないと思われる。我々が最初に、ἀρχὴ ἀνυπόθετος に求めていた真理性とは、やはりかくの如く、ὄν の自己呈示を、「ὄν のありかた」と「何でありかた」に於て顕現させるものなのである。プラトンの考える「真理」とは何かこのように、存在そのものへの問と、個々の自体的な存在についての問を、σύνοψις によって相互に連関させつつ、究極の所で一挙に顕わにせしめるものでなくてはならなかったと思われる。かかる真理性を捉えんとするディアレクティコスの νόησις は、最早 Subjektivität と呼ばれるようなものではなく、やはり何かしら発見的な直観の如きものであり、いわば自らが「存在の開けたる場」におもむくようなものであろう。

結び

最後に、以上のディアレクティケーの上り道についての我々の考察が確認する所は何であろうか。それは、個々の ὄν の何であるかの普遍的自体性の真理を与え、同時に ὄν の ὄν たる所以の存在性を与える、唯一絶対の ἀρχή としての「善」をプラトンが確信していたということである。そして最も重要なことは、その知識と存在が常に相互の連関で σύνοψις に於て捉えられねばならぬということである。換言すれば、ディアレクティケーを提唱するプラトンにあっては、ontology と epistemology は本来区別されるものではないのである。というのも、プラトンにとっ

て、ὄν と ἀλήθεια は全く同義であるべきであったから。ここに於て、我々としては、ἀρχή ἀνυπόθετος の真理性を、それが ὄν の「ありかた」と「何でありかた」を一挙に規定するものという意味で、存在と認識の「かたち」——規定性である、或いはむしろプラトンに忠実には、ὄν 即ち ἀλήθεια の「かたち」であると理解できるのではなかろうか。[24] つまり、一切のイデアがその「かたち」にのっとって始めて、夫々の ὄν としての自己顕示の logos の成立を得ることができるという意味で。そして同時に、その「かたち」にのっとるか否かに夫々の logos の真理がかかっており、そこにこそプラトン的な意味での logical rigour があるのではないかと思われる。しかし我々は今の所これ以上は語りえない。そういう「かたち」自身についての特異であるべき logos がどのように語られ、それを ἀρχή とする或る種の論証が具体的にどういうものか、ということについては、所謂、what is X? question, 直接知、想起、αἰτίας λόγισμος 等々の諸問題を総動員して、上り道の肉付けをした上でないと語れないのである。そしてしかも、それは存在性に於てしか正しくは捉えられない。この点でまた、我々は Parmenides 以後の対話篇の考察を待たねばならないのである。

註

① 後期諸対話篇、例えば Soph. 253d-e での定義、に於てみられる所謂 διαίρεσις と σύνθεσις としての διαλεκτική は、是から我々の扱うべきそれとは一応別に考察される必要がある。

② Arist. Meta. A.6. 987b14—18. 我々は主として以下の理由で Respublica では τὰ μεταξύ 説を否定する。(i) 太陽の比喩に続く「線分」でも properly にはあくまで διττὰ γένη を扱っており、第三の γένος としての τὰ μαθηματικά という新説導入の気配は VI, VII 巻のどこにもない。(ii) διάνοια の対象とディアレクティケーのそれの区別は語られず、διάνοια もあくまで一つのパトス (παθήματα ἐν τῇ ψυχῇ γιγνόμενα 511d) であって、認識の一つの厳然たる

δύναμις (cf. 477d)ではない。διάνοια は、当時の数学者の認識の ἕξις (511d)に対してプラトンの用いた表現にすぎない。(iii) the mathematicals がイデアから異る所以の plurality を seggest しうる個所(526a) の解釈については、Robinson, R. (Plato's Earlier Dialectic, second ed., Oxford, 1953, p. 192) 参照。尚、この有名な問題については、Adam, J. (The Republic of Plato, second ed., Cambridge, 1963, vol. II. App. I to Book VII, pp. 159—162), Ross, D. (Aristotle's Metaphysics, Oxford, 1924, vol. I. Intro., liii—lvii, and pp. 166—168; Plato's Theory of Ideas. Oxford, 1951, pp. 59—69), Robinson, R. (ib. p. 192, 197), Cross, R. C. & Woozley, A. D. (Plato's Republic, N. Y. St. Martin's Press, 1964, pp. 233—238) 等を参照。

③ 数学者にとって「真」とは、厳密には (i) 公理命題 (κοιναὶ ἔννοιαι, αἰτήματα, ὅροι etc.) 自身の真と、(ii) その公理命題からの定理等への推論のもつ 'logical consistency' の二つが意味される。プラトンの批判は勿論 (i) に向けられており、(ii)については、(i) の真理性が問い直されるまでは問題にしても無意味であるという態度がみられる (533c3)。近代の公理主義数学は、(i) の真は問題にせず、(ii)だけを数学的真理性とする。Robinson, R. (ib. pp. 152—156, 166—169), Cross & Woozley (ib. pp. 244—246) 参照。

④ ἀρχή とは厳密に云えば、別のものの λόγον δίδοναι のための ἀρχή なのであるから、ἀρχή の λόγον δίδοναι という表現はナンセンスであるように思われる。実際にもプラトンは、ἀρχή ἀνυπόθετος に λόγος を与えるとは明言していない。しかし、τὸ ἀνυπόθετον で考えられている「善」のイデアについては λόγον δίδοναι が語られている (534bc)。従って、その λόγος は極めて特異な性格を持たざるを得ないのであり、これに対して、「定義」とか「命題」といったいかなる訳語をあてても、おそらく適切だとは云えないであろう。

⑤ ib. pp. 158, 168、尚、註③参照。

⑥ プラトン自身のことばで一見 positive なと思われるものに、「仮設を destroy (ἀναιρεῖν) して」上る (533c) という表現がある。この ἀναιρεῖν の解釈をめぐっての論議が註釈家達の間で活発であり、可成りの無理をして最も positive に 'refute' の意にとる Taylor, A. E. (Note on Plato's Republic, vi, 510c2—5, Mind, N. S. vol. XLIII, 1934, pp. 81—84) から、極めて消極的に、この語は結局上り道の解釈には何もプラスしないとする Robinson, R. (ib, pp. 161—162) に至るまで様々であるが、我々としては Robinson に従う。Ross (Plato's Theory of Ideas, pp. 55—57), Cross &. Woozley (ib. pp 247—249) 参照。

⑦ Pappus of Alexandria, Συναγωγή, Bk. VII, テキストは Loeb, C. L. Greek Mathematical Works vol. II, pp. 596—598, 訳は Heath, T. L. (Greek Mathematics, Oxford, 1921, vol. II. pp. 400—401) にも全訳がある。尚、プラトンが ἀναλύειν の方法の発見者であるというプロクルスの証言をめぐっての歴史的問題に関しては、Heath, T. L. (ib. Vol. I. pp. 291—292), Cornford, F. M. ("Mathematics and Dialectic in the Republic VI-VII", Mind. vol. XLI, 1932, pp. 43—44) 等によって既に否定的回答が与えられている。

⑧ Heath, T. L.(ib. vol. I. p. 372) は、既に Euclid の所で、ἀναλύειν, σύνθεσις, ἀπαγωγή (ἀνάλυσις はこの reductio で始まる) を、他の technical terms と共に注意している。

⑨ deductive 説 —— Heath, T. L. (ib. vol. II. p. 401), Robinson, R. (ib. pp. 166—167), intuitional 説 —— Cornford, F. M. (ib. pp. 43—50), Bluck, R. S. (Plato's Meno, Cambridge, 1961, Intro. pp. 76—85)。

⑩ Arist. Meta. 1032 b5—14 に於ける νόησις の用法も参考になる。他にも、Cornford や Bluck が、ἀνάλυσις もしくは ἀπαγωγή(Bluck) に関して、Arist. を始めとして多くの references を挙げていて興味深い。それらによれば、ἀνάλυσις の少くとも実際例に於ては、発見ということに重点がおかれていて、intuitional と解されて然るべきである。

⑪ 我々としては今の所、当時の数学が如何なる a priori な公理的性格をもっていたか、また κοιναὶ ἔννοιαι, αἰτήματα と呼ばれたものがどういう意味をもっていたか、更にプラトンの批判をどう受けとめたか、等については明言できない。これらの問題は当然別の機会により厳密にギリシャ数学史の問題として考察されねばならない。

⑫ Heath, T. L. (ib. vol. I. p. 370) によれば、Euclid に於て、完全な形での命題は全部で六つの部分からなり、最初の πρότασις (enunciation) と最後の συμπέρασμα (conclusion) は、他の四つの部分と異って、'in general terms' で叙べられると注意している。

⑬ Stenzel, J. (Plato's Method of Dialectic, Tr. by Allan, D. J., N. Y. Russell & Russell, 1964, pp. 29—38, 79—83) は、Rep. のディアレクティケーを、凡ゆるものの本質としての ἀρετή の考察を通しての、いわば ἀρετή の論理による、「善」への synoptic survey として理解するが、我々としてはプラトンに忠実に「ὄν への σύνοψις」で理解してゆく。尚、またこの σύνοψις を後期対話篇の σύνθεσις と結びつけて上り道を解釈しようとする試み (e. g. Cornford, ib. p. 49) のもつ困難さについては、Robinson, R. (ib. pp. 162—165) 参照。

⑭ V巻 比例の ὁρατόν と νοητόν の区別の一つの意味も、また「線分」に於ける感覚の用、不用、の意味も、この点を押え

て考えねばならない。

⑮ 従って ἀρχὴ ἀνυπόθετος は、夫々の ὄν に実質的な logos を与えうると同時に、真、偽に関して形式的、論理的にも、その logos を logos として成立させるものであろう。

⑯ この Phd. 100a と 101d の叙述は、所謂 logical consistency についてのプラトンの厳密でない表現の一つである。註③参照。尚、この問題については、Burnet, J. (Plato's Phaedo, Oxford, 1911. pp. 109, 113—115), Robinson, R. (ib. pp. 126—139), Bluck, R. S. (Plato's Phaedo, Routledge, 1955, pp. 168—173), Hackforth, R. (Plato's Phaedo. Cambridge, 1955, pp. 138—141) 等参照。

⑰ 結論を refutandum とするものの実例は Meno 86e 以下、ὑπόθεσις 自身を refutandum とするものの実例は Phd. 91c 以下参照。

⑱ コンテキストに於ては、仮設をたてるまでのプロセスであるケベスの反論 (86e—88b, 95a—95e) と、実際の不死証明 (100b—106e) との間に、可成りの対応関係がみられる。

⑲ 勿論エイドスの κοινωνία proper の問題は後期対話篇を待たねばならないが、少くともその suggestions は、Phd. でも他でも (e.g. Rep. 476a) 見出せる。

⑳ この問題の歴史的解釈の経過は Cross & Wooziey (ib. ch. 9) に整理されている。他にも、Robinson, R. (ib. ch. XI) 等参照。

㉑ 514b4—5 は Adam, J. (ib. vol. II, pp. 90—91, App. VI to Bk. VII, pp. 179—180) の読み方に従って、οὐ ταῦτα ἡγεῖ ἄν τὰ παρίοντα αὐτοὺς νομίζειν ὀνομάζειν, ἅπερ ὁρῶμεν; と記る。

㉒ Heidegger, M.: Platons Lehre von der Wahrheit, Francke Verlag. zweite Auflage, 1954.

㉓ ib. s. 34—36. 38—41. 尚、Heidegger は自己の証言についてのテキスト上の論拠として二ケ所ばかり挙げて論じている (Rep. 515d—ib. s. 41—42, 517c—ib. s. 43—44)。しかしいずれもそれ程有力ではない。

㉔ かかる考え方は、後期対話篇、例えば Theaetetus (185a 以下の τὰ κοινά の議論—そこでは κοινά のうちでも οὐσία と ἀγαθόν には特別な status もしくは type が与えられている) や Sophistes (254b 以下 μέγιστα γένη の問題) での、所謂 logical type が異るとされる formal concept 的なもの (Ryle, G. "Plato's Parmenides", Mind vol. XLIII, 1939,

esp. pp. 111—120, 131—136 参照）という解釈の線にある程度近いものと、Rep. V—VII 巻というイデア論の最もイデア論的な性格とを、考え合わせた結果出て来たものである。真理性とか存在性といったことばも同様である。

（本学大学院博士課程・哲学）